慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アーヴィング· ハウ著『辛抱強い仕事』 : 民主主義的ラディカリズムの政治論集(一九五三-六六年)
Sub Title	I. Howe, Steady Work : Essays in the politics of democratic radiealism 1953-1966
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究 : 法律· 政治· 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.1 (1968. 1) ,p.118- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680115-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Irving Howe,

Steady Work: Essays in the Politics of Democratic Radicalism 1953—1966

New York, Harcourt, Brace & World, 1966, xvi +346 pp.

アーヴィング・ハウ著
『辛抱強い仕事』
——民主主義的ラディカリズムの政治論集（一九五三—六六年）——

本書の扉に「昔、東欧ユダア人の神秘的な村ケルムで、ひとりの男が村の門際にすわつて、救世主の来るのを待つように言いつけられた。彼は報酬があまりに低いことを長老たちに不平をならした。《お前の言う通りだ》、と彼らはその男に言つた、《報酬は低い。だが考えてみよ。この仕事には辛抱が要るのだ》」と、書かれている。標題はここからとられたものである。

この『辛抱強い仕事』こそ、著者アーヴィング・ハウが過去十有余年のあいだ手がけてきたものであり、「思想的闘争と政治的コミットメントとの記録」にほかならない。すなわち、五〇年代はじめのマッカーシズム、冷戦の延長と膨脹、アメリカ知識人の保守主義的ムード、国内のスターリン主義の壊滅、ニグロ解放運動、学生の反抗、ヴェトナムの危機など、困難と問題と危機とが縺れた時代苦に敢えて挑戦したラディカルな魂の記録である。それは「六〇年代の紛糾」「もう一方の側」「肖像と論客」「前提と再考」の四部と、「どのように出発したか」というハウ自身の三〇年代の追憶より成つている。これらを一貫する著者の態度は、「問題の複合さに着実かつ強烈にかかわり合い、みずからの前提のために、そしてしばしばその前提に対立して闘い、そのコミットメントの諸テーマに繰り返し立ち戻りゆく精神の統一性」である。こういう言葉にわれわれは、ハウの凄しい個性を感ずるであろう。事実、この論集は彼の純粋な心情が激情となつて燃えあがつたようなところが少なくない。そしてそれは、著者みずから述べているように、アカデミックな論説というよりむしろ、ジァーナリスティックなスタイルをもつて綴られている。とくに第二部および第三部は現代的論評にあてられているため、その感が深い。ここでは、アーヴィング・ハウのいう「ラディカリズム」、および彼の苛斂誅求する「社会主義のイメージ」について考察しておきたい。

だがそれに先立つて、彼の「追想」の断片に触れる必要があろう。彼の思想の原体験は、やはり三〇年代にニュー・ヨークのイースト・ブロンクス区で育つたということに根差しているからだ。彼

はつぎのように記している、「地方性というものはそれ自体の決定論を生む。そして三〇年代のニュー・ヨークの地方性――それは人種文化と社会的危機との一時的な出会いをあたかも歴史の変更し難きひとつの事実であるかにみなしがちであつたが――はわれわれにつぎのように想像せしめて行つた、すなわち、ここニュー・ヨークにおいてのみ、ひとはまつたく生きるに堪え得るし、しかもトータルに反抗せずには、市の生活は惨めで、圧縮され、堪え難きものだと」。政治と論争に縁どられた、今ではひとつの感傷的な伝説となつている生命のみなぎるあのメトロポリス、だがそれは同時に、「残酷な、醜悪な、戦慄すべき、悪臭を発つジャングル」でもあつた。ハウは回想する、「ニュー・ヨークは、ユダア系移民の家族で育つたすべての少年が、それを意識するかしないかはともかく、疑惑をもつて眺めるように教えられてきた疎遠な世界の具象化であつた」。

彼は一九二〇年生まれであるから、三〇年代にはすでに感受性の鋭い青年時代をむかえていた。一三歳か一四歳の頃にシァーウッド・アンダーソンの論文を手にして、憤りの雨涙にくれ、貧困の何たるかを知つた。一五歳のときに『アクセルの城』を読む――少しも理解しなかつたが。高等学校および市立カレッジに通う若きハウにとつては、「運動が我が家であり、情熱であつた」。この運動に若者たちをつなぎとめていたのは、それが人生における《目的》であるばかりか、生起する一切のものに整合的な視座をあたえてくれたからであつた。だが、そのイデオロギーは必ずしもマルクス主義的であつたわけではない。マルクス主義は有力な分析道具として役立ち、批判的優越感をもたらしてくれたことは事実としても、ハウはタルマッドの暗誦のように運動において『資本論』の公式を教えられることに嘔吐を催している。今でこそ愛惜をもつて振り返られるが、この運動はさまざまな分派がうごめき、無作法な、傲慢な調子を帯びていた。ハウはインディアナでのある暑い夜に、アルフレッド・カザンと激しく口論した。カザンがこの知的生活を "sodden brilliance" という逆説的なフレーズで描写したことに苛立つた当の彼も、今ではその通りであることを認めざるを得ない。「一切が過ぎ去つた。そしてわれわれはそれをとり戻すことはできない。わたしはアメリカのラディカリズムの復活より以上のものを何も望んでいないが、過去はすんだことだ。わたしは過去を再び創造しようという願望をもつておらず、そうする可能性への如何なる信念をももつていない」。

何故にラディカリズムの復活なのであるか？　ハウにしたがえば、今日もつとも驚くべきことは、知識人の使命という理念――商業文明によつては恐らく実現不可能な諸価値へ捧げられた生活の理念――が次第に魅惑を失つてしまつたことだ。共通の問題と体験によつて結び合わされていた三〇年代の知識人の世代は、その指導的地位を喪失しつつある。彼らが抱懐していたマルクス主義、とくに労働者階級の《革命的潜在力》とか、国家の《枯死》、《プロレタリアート独裁》といつた政治的マルクス主義の諸側面は崩壊させられた。彼らの挫折感、そして体制への信従、画一化ということがアメリカの思想生活の決定的傾向として指摘されるゆえんである。本

書に収録された有名な論文 "This Age of Conformity" は、一九五四年の『パーティザン・レヴュー』誌に掲載されたものだが、それは「アメリカの政治的・思想的生活に浸透している順応主義の荒涼とした雰囲気に反対(ディセント)する」(*Dissent*, Vol. 1, No. 1, winter, 1954, p. 3) もっとも激しい批判である。

確かに、集団としての知識人の社会的地位、威信、経済的条件は変化した。彼らはもはや社会の限界に生活してはいない。インテレクチュアルな "Establishment" のなかに鞏固に守られてさえいる。政府、官僚機構、企業体、そして大学、技術的・管理的社会における知的特殊化への傾向は、少なくとも五〇年代にいたって知識人をアメリカ的祝福に導きいれ、ミドル・ブロウの大衆文化やジァーナリズムと抱合されている。知識人の selling out! かかる背信行為に向けられたハウの批判の筆鋒は、「権力と特権の源泉からのトータルな疎遠、われわれの文化の一切の側面を盲目的に不合理に拒否することでさえも、もしそれが攻撃の奔放な放出を可能とするものであれば、遙かに健全であろう」と、痛烈をきわめる。こういう彼の態度には、知識人はつねに絶望的《反対》の立場にいなくてはならない、というボヘミヤン的世界への郷愁がまつわっているかに思われる。ともかくわれわれの世界はラディカルに拒否され、変革されねばならない。

二十世紀半ばにおいて社会主義者たることは、懐疑と再評価と危機とともに生きる能力、すべての真実な現代人が生きなければならないように、問題的なもののスタイルによって生きる能力を意味する、とハウは強調する。この問題的なもののスタイルとはどのようなものか、まずこの問題を明らかにしてみよう。それは伝統的な社会主義理論、とくにマルクス主義と相違するものである。ハウは何処にもマルクス主義を社会科学的厳密さをもって論じていないし、まして今日その正統性の解釈がまさに問題的となっているけれども、そのような点についても触れているわけではない。だが重要なことは、《科学的》という言葉の物神的な使用、あるいは歴史の神格化を拒否する態度である。「……結局《歴史》はわれわれに何ものをも保障しないことを、われわれは知っている。すべてのものは今や人間の意志の問題なのである。恐らく以上すべてを言いかえるなら、ユートピアの映像とはひとつの真正な選択、深奥の必要性としてとどまっていると主張することである」。かくして、社会主義とは歴史的必然性とかその定言命令ではなく、まさにわれわれの欲望の名である。

同様に、マルクス主義の経済決定論に対してもはなはだ批判的である。マルクスのオリジナルな衝動は真の人間的目標、人間性の人間化ということにあった。したがって彼の経済学的諸範疇は、人間の社会的ならびに実存的関係を解明すべきものであった。こうしたヒューマニズム的側面をなおざりにすること、「商品の物神性に計画の物神性を代置する」ような、ハウの言う「左翼の権威主義」傾向こそ社会主義の伝統に反する。マルクスが生産力の増大を社会主義に不可欠な前提条件として語ったとき、彼はそれを少なくとも西欧世界の《普遍的》発展として思い浮べていたのであって、それと同時

に、ブルジョワ的工業化の過程において社会的意識が成長して行くものと考えていた。これはスターリン主義的工業化というものとパラレルでない、と言うのはまつたく正しい。ハウの指摘するように、全体主義的権力による工業化の遂行、そして工業化を社会主義的目標そのものとみなしたスターリン的方法はトロッキーのそれとも相容れない。人間性を蹂躙した工業化は、体制如何を問わず、堪え難き残忍さをともなう。もしもディッケンズの如き人間がいたとしたら、現在のロシアに対して何をなしたかをただ想像してみよ！このように述べる著者はパステルナークのうちに、「トータルな国家に対する人間の《永久革命》を表象する」ジバゴ博士の力萎えた人間的形姿を偲んでいる。

さらに、問題的なもののスタイルは、最近のラディカルな運動、ハウのいわゆる《ニュー・レフティズム》のスタイルとも異なつている。彼にしたがえば、ニュー・レフティストたちはイデオローグとデスペラードの二範疇、それに人種的類別として白人と黒人とが組み合わされる。学生運動、公民権運動など、それらにはさまざまな陰翳があり、敵対的な関係にさえあるのだが、アメリカ社会の欺瞞と空しさへの反抗という点では軌を一にしている。だが、ニュー・レフティストは、彼がみずから否定しようとする諸価値との共棲関係に囚われの身であることを見逃しがちである。英雄的な、殉教者的な態度、しばしば暴力への惑溺に陥る錯乱、彼は反抗しつつも、政治的参加への意欲に欠け、変革への希望や期待を真剣にもつていないのだ。それ故に、「そのパラドックスは、彼らはしばしば政治にコミットしているとみずから誠実に思つている——しかし、社会革命のマルクス主義的期待からもまた離反しているけれども、余りに調子はずれの、かつトータルな社会の否認を主張する政治であつて、際立つたパーソナルなスタイルの栄光、あるいは重荷のほか彼らにはなにも委ねられていない、ということである」。労働者、ニグロ、学生、教会グループ、リベラル、知識人たちとの "coalition" approach を実践的に示唆しながらも、ハウはニュー・レフティズムのパーソナルなスタイルとの齟齬を認めざるを得ない。

かくして、「社会主義のイメージ」、あるいはその問題と課題とが如何なるものかはほぼ明瞭であろう。まずそれは、全体主義的、権威主義的なリヴァイアサン——現代の福祉国家というものもテロリズムをともなわずに、そのような傾向性へ志向しつつある——に対する抵抗である。その抵抗となるものは多数の政治的・経済的ユニット、つまり機能諸集団の存在である。社会主義的理念とは第一に友愛、平等、自由のデモクラシー的諸価値へのコミットメント、第二に生産手段の重要部分がデモクラシー的に管理されるような未来社会へのコミットメントである。これらの緊張関係を宥和するものこそ機能的な集団の作用にほかならず、「集産主義的経済体制内における自律的かつ多元的な社会諸制度のための構想」を発展させることが課題となる。ハウが繰り返し明記していることは、新しいラディカルにとつてひとつの主要なテーマは、「デモクラシー的諸価値の明確化」であり、「ラディカルな政治がアメリカ社会に深い永続的なインパクトを常にあたえるためには、それはデモクラシー的諸価値に根差さねば

ならず、デモクラシー的手続きにコミットされねばならない」ということである。狂信的な行動ではなく、道徳的な責任に堪え得ること、右の言葉は、今や「トータルな疎遠の不毛性を回避しながら批判の構えを保持」しようとする知識人自身に刻印されるべきであろう。

ここに提示された社会主義のイメージは、著者の冴え返つた批判の鋒先に較べると、イメージとしていささか陳腐な憾みがないではない。事実、彼はR・クロスマンとかL・コラコウスキーなどを引用しているところからも、いわゆる《修正主義者》にもつとも似通つている。けれども主義の名などどちらでもよい。少なくとも現在のところ、ハウにとつては社会主義に定義をくだすことが問題ではない。「われわれは敗北の影のなかに生きている現在、社会主義のイメージをとどめ、意志することは定義のためのたえざる闘争であり、殆んど苦痛の行為である。しかしそれは創造を可能ならしめる苦痛なのだ」という言葉がそれを語つていよう。まさに問題的なもののスタイルとして生きることである。六〇年代における新しいラディカリズムの議論は、『パーティザン・レヴュー』誌一九六五年春号によつて開始されたばかりである。こうした新しいラディカルのイメージがひとつのイデオロギー体系として結晶化するかどうか、むろん遽かに結論づけることはできない。ただ、「絢爛たるラディカリズムは中身のない貝殻となるだけだ」(Daniel Bell, *The End of Ideology*, The Free Press of Glencoe, Ⅲ, 1960, p. 298.) と言われないためには、新しいラディカルは現実と馴れ合うことなく、現実にまみれて無限に堪えゆくシジフォス的課題を引き受けねばならない。それでこそ「辛抱強い仕事」に価するものではないか。

(奈良和重)

A. T. Steele,

The American People and China

New York, McGraw-Hill Book Co., 1966, 325 pp.

A・T・スティール著

『アメリカ国民と中国』

米中関係の緩和を阻害する要因は、米中双方に多く見られるが、その中でも相手国に対して持つ認識が敵視感情のカラに覆われている限り、両国の関係が改善の方向に向うことは考えられない。こういつた観点から、一九六六年は、米上院外交委員会による「中国政策に関する公聴会」および下院外交委員会の一分科会による同様の公聴会の開催によつて、画期的な年であつた。すなわち、アメリカの大学、研究所の中国専門家、研究者が各々の研究を踏まえて「多くのアメリカ人にとつて暗黒で神秘な国、中国を解明しようという貴重な公共へのサービス」(ニューヨーク・タイムズ) を行なつたからである。われわれはアメリカにおける中国に対するイメージの特異性とその歴史的変化を改めて思い出したのであつた。